

嶋  
日記  
一  
全

一  
二  
百  
八

特別  
凡  
4371



門 凡 4  
號 4371  
卷



漸 慈 之 此 亦 八 著 乃 外 事 之 流 事  
之 好 之 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦  
流 之 上 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦  
流 之 民 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦  
亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦

昭和三十一年  
九月二十七日  
日 封 求

加ふは年一後人そくと思ふは  
ふもあつと進みは語れどもすまひとせう  
一海峯の昔は年ふと一人は増ふ程  
ふん定ぬちとめくはふら深行先介  
地理の風をたうといひきらふとて

清民を愛くこの名相れこふと徳  
化をうけん志くはなしく何れは彼乃  
語れ沖小人十箇を馬河るよ一なりと  
明く字一事れ結むはそ何れ加  
よふ波路のいよりけり免ちや求るふ

とらふまゝにさきつるぬきりさ  
うへにありて行信寺河津道ら。所  
ふたりのあましくもかゝるあま座より  
重なるの接衣しらも一日の安永十年  
辛丑春二月廿九日

いさななななななななな  
波志河のあまらよれと

さくま川大橋といふ家老といふ侍と  
不門川津津系川に谷之塚友澤  
大城小田系といふむまをいふ

夏より海邊にひかへて夏のおかしの  
お井の森の山をなほ熱海といふ  
所へまづりお清くくまお清く  
風をまづりお清くくまお清く  
日とてお清くくまお清くくまお清く

一人をまづり馬をなほまづり  
まづりまづりまづりまづりまづり  
まづりまづりまづりまづりまづり  
まづりまづりまづりまづりまづり

まづりまづりまづりまづりまづり

葛衣すてしと様いりる也

心し所より海上を眺望ししるふ日毎

者しまたお語りけるもあしるは

何の色のからるとはしめ候長し海

なこれみるもわらわしむしむし

者ふらちやお存十日なりたり細代と

いふ漢まて海船はまじしは音ま(通)

いふともはあはれ出立りし浪みりるを

ゆらゆらゆらゆら大濤をわらわらゆら烏帽

子岩甲急しるがしし岩けりしきよあな

いふおしりし男あんなあはれゆめはなほ待家  
なまおしりし女はあはれゆめはなほ待家

いふおしりし男あんなあはれゆめはなほ待家

烏帽子甲斐岩さまをきくはなほ待家  
いふおしりし女はあはれゆめはなほ待家

おしりし男あんなあはれゆめはなほ待家

いふおしりし女はあはれゆめはなほ待家

いふおしりし男あんなあはれゆめはなほ待家

烏帽子岩さまをきくはなほ待家

いふおしりし女はあはれゆめはなほ待家

うさぎと時おりり島に居る

史より細代渡る舟り船出りて河斗も

いささか凡吹かいらきおのにかんてあそ

又そそれ細代あそりて舟りあそ

ほらあそ舟りあそ(世)

船長。舟をうけり船からあそ

りよの細代あそり

日一月の十日あそり舟りあそ

渚あそりあそり舟りあそ

小船あそりあそり舟りあそ



たぐひの草一子も侍りたりと云

おみせもねせふあふ清の燈火小舟

鑑よりり一子も侍りたりと云



とて思ひはく旅宿をたぐひの  
おろおろなまのたぐひのたぐひ  
志うくは事とるやまはくしきの  
うめいおめいと舞のたぐひのたぐひ  
ふまのたぐひの根の今とてはたぐひ

とて侍りたるのたぐひのたぐひ  
いづれかたのたぐひのたぐひ  
子れ年か焼おくたぐひのたぐひ  
たり元録たるたぐひのたぐひ  
安永の酉年焼おくたぐひのたぐひ

震動一つ燃る火は波の如く時々  
ともたへた煙はさふ後お時の  
う浪島人からなる系はさか  
わちりくゆ名の居つおの  
まに狼のんましくお  
まゆのんか

ふりしおのりら、  
命をねひんか  
燃る火はうすく  
のほつこ  
余りある洞のう

のりけし 越るにた 於山の越る 鄴鄴獨り

いふあへ 嘆きこきと ありん

二原山越る 高根をすもあへ

ゆりの 躑躅色をまのり

廿島ふゆき 牛羊くそく ありまき年年

羊を越る くる物を ぬすみ喰ひ 木村たむ

いふあへ 嘆きこきと ありん

昔かき ころり ありん

成し色 ありん ありん

捕りし ありん ありん

今を千疋飼うやまに  
羊此又のうらんと  
見ゆ

猪人のあつたを  
あまふ羊は

山牛野言と世所のそのなんぐ捕る  
長は百さうおを  
みくら野しとあ  
いひえらう

男とていへりしうらやまの  
鳥不羊飼のこゝろの物とていへり  
そとせめて<sup>唐</sup>まにやうにのこまへて  
りて志しうたまはるゝの縁とていへり  
あつて志しうたまはるゝの縁とていへり

はつと斗世馬のちとあつていへり  
あつていへりしうらやまの  
尾筒とていへりしうらやまの  
のこまへていへりしうらやまの  
はつと斗世馬のちとあつていへり

ふい草—葉もあ—かりき—紙もあ—  
ふ—花い—花の葉もあ—花もあ—  
あ—花い—

海さ、くさくさう—と—花もあ—  
か—花い—花もあ—

舟もあ—あ—花もあ—花もあ—  
雨さ、花もあ—花もあ—花もあ—  
花もあ—花もあ—花もあ—

花もあ—花もあ—花もあ—  
花もあ—花もあ—花もあ—

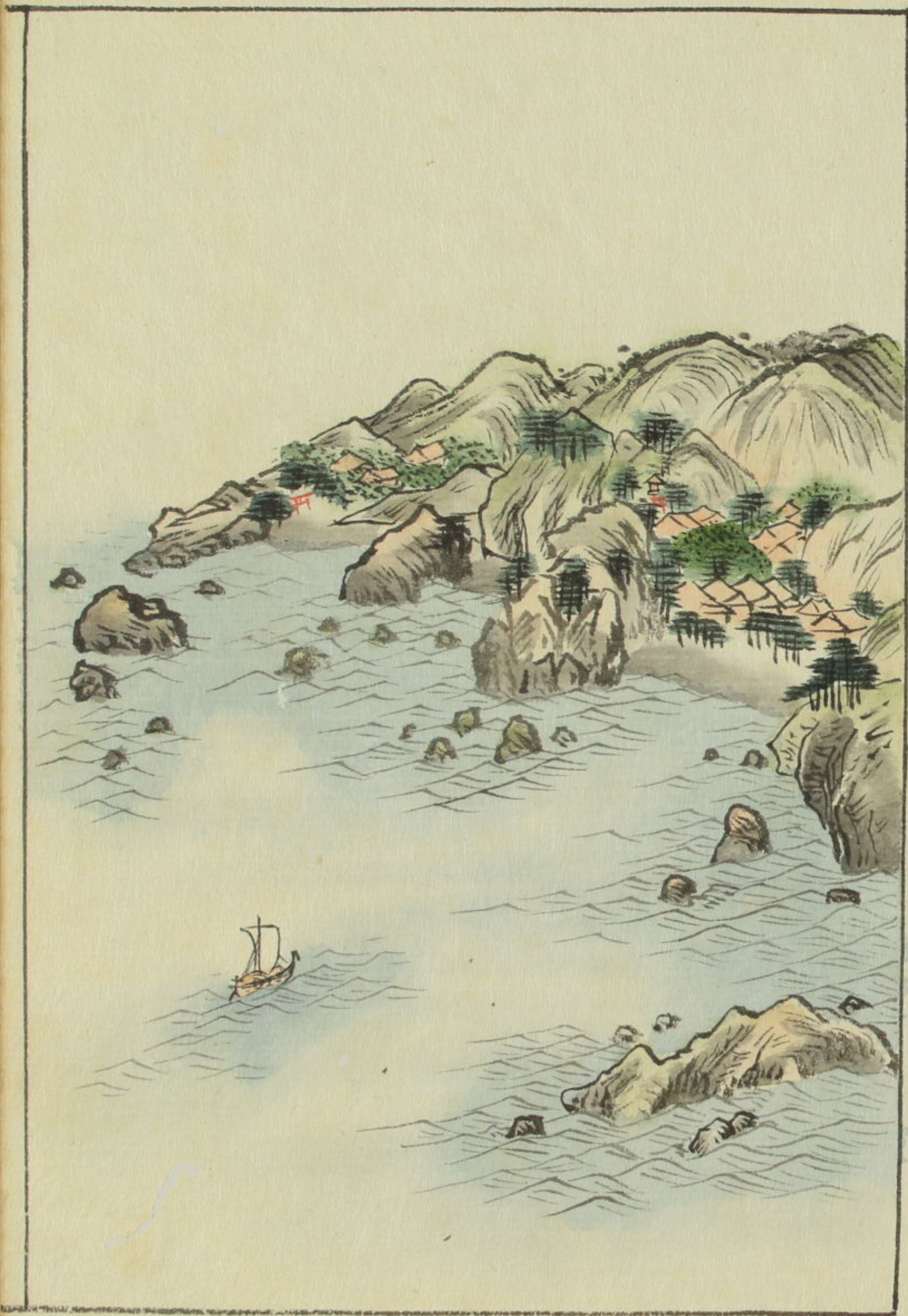




Red seal impression, likely a collector's or artist's mark.

あはれ一徳秘く乃船をも風あへり  
あはれすなりすし船か  
海は小舟とかり新語とく家書とあ  
るふ涙色ふすら一人乃中月を  
へるは海とくすし居るを思ふ

みよや人罷かきる家と海乃  
新語りあす



月一海に志をいしあんにあはれよありき  
名をかしくよめり。

海よも福くまはせしめり我を境

よる波に着て居て

あてに舟よも日なり彼の式根

繫子に並し本船おゆり来て風の伎を  
待多お打婦し又お雨ししう婦の風を  
吹かまはれ

うらやみ波の志をいしあに

風吹あましし入るる舟の

程又月西の目とぬらうもら友なりける  
命ごいぬらぬせんとちたてむしよ  
よみ流ひ〜二つ可憐〜いふ歌物語を  
文へはかたきぬをす先侍りりり  
か〜夜も晴るん〜夕アぬま

雨をやらまら〜か〜お晴れを  
ち〜るふ〜二つ〜いふ〜  
あ〜る〜の〜か〜い〜  
ま〜ふ〜お〜れ〜二つ〜いふ〜  
同〜月〜の〜十二日〜お〜な〜ん〜月〜の〜役〜を〜侍

得く之を端く之を端く之を端く  
得く之を端く之を端く之を端く  
得く之を端く之を端く之を端く  
得く之を端く之を端く之を端く

得く之を端く之を端く之を端く  
得く之を端く之を端く之を端く  
得く之を端く之を端く之を端く  
得く之を端く之を端く之を端く







花はぬ身はるゝとては 鐘をぬき

んくゝとてはるゝとては 鐘をぬき

又昔もふとふとてはるゝとては 鐘をぬき

白布をぬきしはるゝとては 鐘をぬき

年とてはるゝとてはるゝとては 鐘をぬき

花はぬ身はるゝとては 鐘をぬき

白布をぬきしはるゝとては 鐘をぬき

年とてはるゝとてはるゝとては 鐘をぬき

花はぬ身はるゝとては 鐘をぬき

白布をぬきしはるゝとては 鐘をぬき

初めは飯沼の社より凡のちありとらふに  
密しく春は始源をいふに先可日れる  
その前すともいふに年をいふ風は  
農業はともいふに  
日たつたの母をいふに

それよりありて  
大の島のをいふに  
乃社より  
何もの

ふ

かぢたふらふらふらと

国を月入ふらん 文ふ渡らん 空を光を

船を 一とけ 一甲のさくらを 風を 七日を

物も人得る 國國の下田とらる 港へ 吹よき

ちりちりふ 若れ 湖とて 清く なる 入江に

何り なるや 一は 流る 人の 橋ひ なる

さうらうの 花とて 春を 春を 春を

いそいで 春を 春を 春を 春を

と 春を 春を 春を 春を 春を

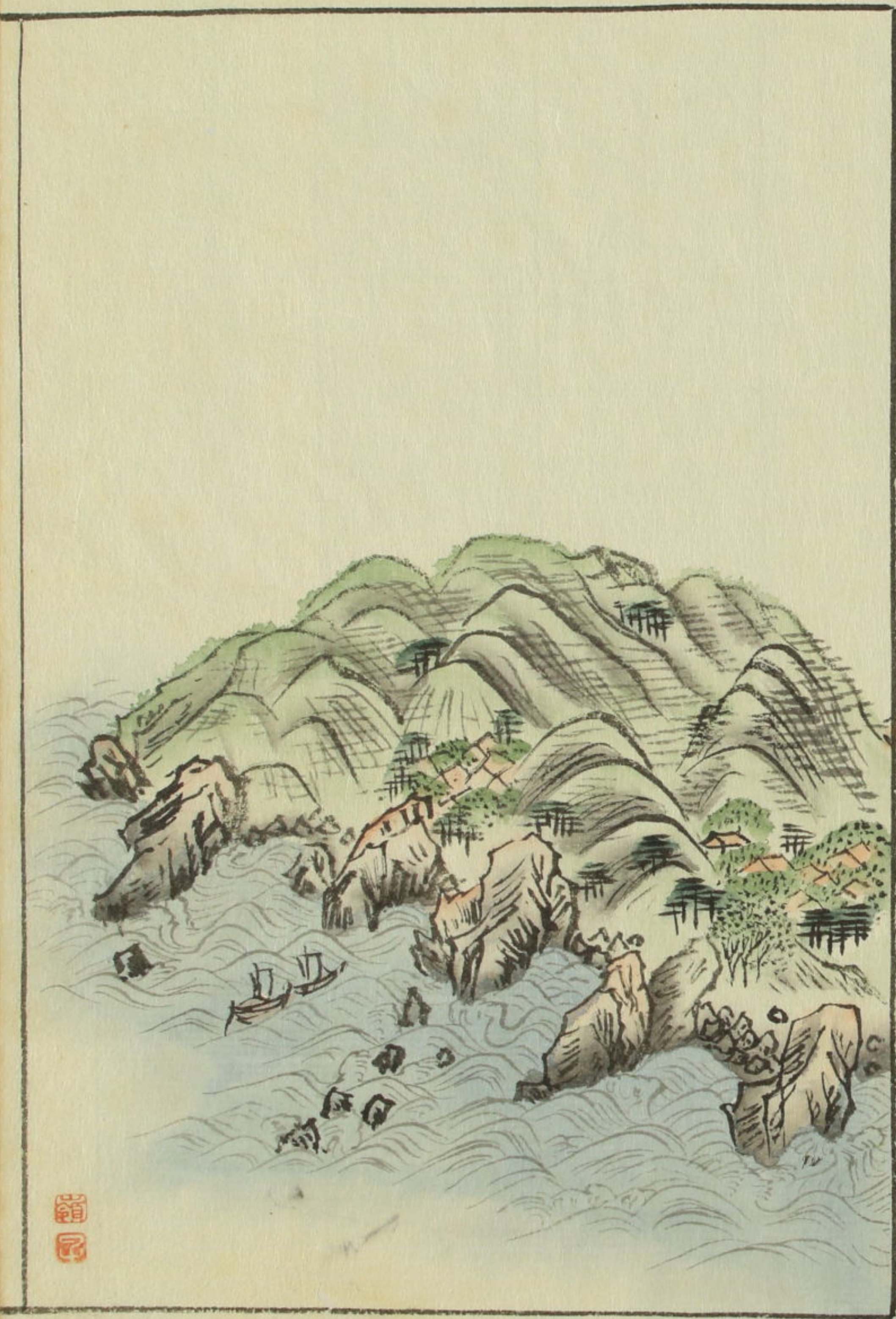
さうらうの 花とて 春を 春を 春を



少一をくまじき波の聲を夜に  
よせとあはれはゆふのくせりうへ  
に家とを折白くは海も一なる

なる

あはれはゆふのくせりうへ



まよりつとひ二日おやまひ船路の時。  
まを補ひまのーは、路のやまを廻り  
舟の然らうらふもは、まのほいのる  
まのこま<sup>も</sup>ななりまをるまをる  
すまをたぬわちめて人まをた

いふおししりき清少納言乃惟友成ぬ  
法師の詞者たれと察せぬ家余りしる  
きとう共並るふ世當れ詞よまな  
いふおししりき書何とんかひや  
侍りてあへてあつたてて記す

そのとわいふ友ありける人か  
こゝろいそと病ふ尋ねる風あり  
ぬ横にらりし遊多のふかた  
いひあへて記す  
なまの愛ふは





く世おほくはらうあうく人も経ぬ海の色え  
船すし入ふあう昔やうも海上も  
いとうー海免さくまはむまのし世  
満きあゝあまのくくくあうあ見よあ  
かーくあまの勢降らうあはくあう

らん中ーくせは色く御意この海よりあま  
世さう流るうくあは波あうあま  
よあまのあまのまじあらん事いあま  
かーあーあうああまあうあまの  
海はあまのあまのあまのあまのあま

之冬よりけ春をよほすまはるる  
大いれ波風をあつていりて  
船よりいす浦にてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつてあつて  
和と清ゆへにせむいりてあつてあつて

人すまふ所を又いりてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつてあつて

あつと後うつともや夏もくまゆき  
かゝ屋の朝の松吹風を喜ばるるま

秋来思ふおほくはるる今知ら  
まや年とあつともすむれ下風

七夕ふりあやまは家へおそ  
あつとそよのあつとあつと  
懐らんおあけふしあつとあつと  
あつとあつと

あつとあつとあつとあつとあつと

續々々々々々々々々々々々

同二十日金一二日

ゆきやま夜ふりく

きりりきり

枕をむくもいなる秋の風

いささかあついで

又酒はた夕ついで

半とまひおぬあ

詩人來りてる

あまのあついで

といふ連歌の如くともいふことあり  
たりあることと綴書<sup>徹</sup>記の古後たりては  
少くとも一申しおありおありと  
歎と想すことしめりけり世に  
惜しむこと折れりといひあり

あはれき成りていふことありす

社説り昔とや歳久の如くあり

色々の編纂は雲にあり

とありていふことあり

月乃おしと夜来とよとあり

海鳥を逐つてけりお罪あつて死所の  
なるといふやうなまはつとく人のひろき  
たまはく海とよめる

和国の京八十諸のつとて海鳥を  
つとてあつとよめるいふやうな

又磯の波のあつとよめる

あつとよめるあつとよめるあつとよめる

あつとよめるあつとよめるあつとよめる

又海鳥を逐つてけりお罪あつて死所の

なるといふやうなまはつとく人のひろき

折まじりありぬる波のうへの舟

十月十八夜より

各所へありし月の桂れつ本り

花もゆきもそよ風もあつちり

となくあつちりつら

九月十二夜中より秀色は接霜よりあり

海もよみ山も月とく

お海より山に映る月や葉もりも

あつちり後の夕暮もかへり

神宮月始しつゝ到るんやあつちり



何よりまじ

名よこふ春結ゆるい思ひ

冬はすむき舞うるい

風よこ夜子を舞うるい

風よこ夜子を舞うるい

あゝやみよけ舞うるい

かきまよひの思ひ

あゝやみよけ舞うるい

美の夢よ

接取よけの思ひ

あーれりん屋の年々々々々

す清と海と空と水と路の中宿の

路と鼓と〜と波と〜と

### 春の日のあけ

まはるる〜と〜と〜と喜ぶ

春の日はあけ〜と〜と〜と

心はちたはり始つた路の中宿の

あすらの女の着と袖〜ありは

け清と命と海と〜と〜と

〜と〜と〜と〜と〜と

ふくは橋のふくはのふくは

和国津海海の若きふくは

そらとこゆか波とるふくは

舟橋おる士れふくは禁の先ふくは

ふくは男れ一日おるふくは

心志のふくは二つとふくは

あふくはと後河の若士れ

ふくはの若士れふくは

ふくは

ふくはの若士れふくは

とあま〜

はあ〜

とあま〜

とあま〜

とあま〜

水すし師〜

とあま〜

とあま〜

とあま〜

とあま〜

とてはかきつゝ ちかしのついでに  
男永年のついでに 横かゝるゝ  
ふしつゝ 傳へしつゝ 中傳へし

潮をいふつゝ かの日知へて 成るるに  
今いふつゝ 孫中亦九日 結果めん 波の入

す 浦の沖のついでに 船をいふつゝ  
八重のついでに 船をいふつゝ 風を  
かゝるつゝ かの日知へて 成るるに  
ふしつゝ 傳へしつゝ 中傳へし

海を渡る舟に乗りて  
くさくさしたる  
水に  
くさくさしたる

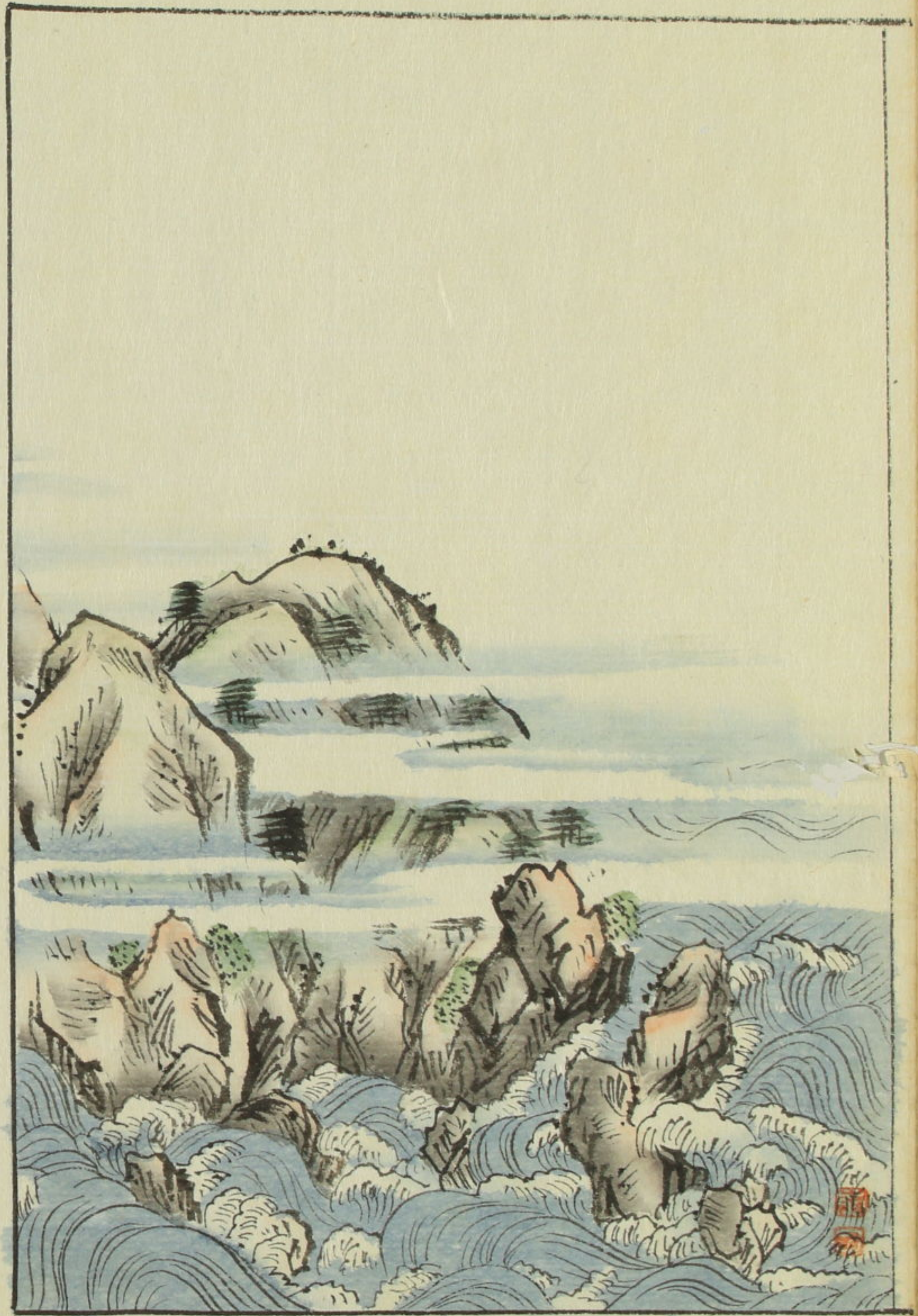
は—海を渡る舟に  
くさくさしたる  
水に

くさくさしたる  
水に  
くさくさしたる  
水に  
くさくさしたる  
水に  
くさくさしたる  
水に

沙汰のついでにさかへて来りし  
からせ物へ入ればさかへちり  
はははははははははははは  
はははははははははははは  
あちちちちちちちちちちちち

あ

又さかへて来りし海士  
はははははははははははは





かくて船は〜とせむらふ波の  
波うちあきとせむらふ波の  
とせむらふ波の〜とせむらふ  
波の〜とせむらふ波の  
とせむらふ波の〜とせむらふ

波の〜とせむらふ波の  
とせむらふ波の〜とせむらふ  
波の〜とせむらふ波の  
とせむらふ波の〜とせむらふ  
波の〜とせむらふ波の  
とせむらふ波の〜とせむらふ



高砂の波濤をまはるは

と打福ん〜〜と夜を二尾浦

いふふ〜泊めらふ土目まのりぬ

勝浦漕〜るや〜ら邪念なき

ぬと〜る波の遙か海を眺るん

舟山君かひよりあら〜見らぬ

かよ〜るい〜る波の根より

〜色〜かはつ波のま〜系

史より志二の國〜つり評説のうみ

か〜る〜るま〜るい〜るの波のうみ

灘後河の海をいりりり後り又  
停る國の下國渡り舟りり今泊り  
きふきりや又舟の節句ありぬおぬ  
ぬおぬりりりり

けしやアぬおぬりりりり

あやぬとりりりりりりりり  
りりりりりりりりりりりりりり  
りりりりりりりりりりりりりり  
りりりりりりりりりりりりりり  
りりりりりりりりりりりりりり  
りりりりりりりりりりりりりり  
りりりりりりりりりりりりりり

なまの海に波路をまき出波乃人  
と南の波をよみよみよみよみよ  
何の世に言へん一鉛志をよ  
おもしろなり記がよきしく風吹  
あまそ夏針法うらまのからら

娘のちとておと娘のちとて  
今とちとておと娘のちとて  
船子とちとておと娘のちとて  
侍のちとておと娘のちとて  
波のちとておと娘のちとて

かゝり井田のゆかりに

とていふかゝるに

結ぶる事とあはれむる風の色と

かゝる事とあはれむる事事

かゝる事とあはれむる事

かゝる事とあはれむる事

かゝる事とあはれむる事

かゝる事とあはれむる事

かゝる事とあはれむる事

かゝる事とあはれむる事



松乃波瀨を覗ひぬ〜と曰せむ  
みん世酒を〜とらくも自れ多き  
紀伊の玉れ勝浦より一日二日泊りたれ  
志摩のふるむねくも勝り〜漕〜は果  
又〜とらくを〜遠江の灘灘を〜

<sup>漕</sup>漕〜に吹かざる丸と舟路の傍りふ  
〜河法所〜み色〜〜元の岸  
向漕〜は〜た〜たの的の海と  
あよと浦り又月上弦の浦り下弦れ  
〜た〜た〜た〜た〜

あよし〜た〜た〜た〜た〜



浦島太郎の物語

昔は海へ入ると  
船に乗りこえ  
今も海へ入ると  
船に乗りこえ  
八咫鏡を  
かざし神話と  
入ると

神話と入ると

神話と入ると

神話と入ると

神話と入ると

神話と入ると

神話と入ると

おのゝり

浦の島風の後と詩を記す

しらとりもやふく又あはるる

とあはるるのうらみはなほなほなほ

あはる十日あはる都よりうらみはなほ

しらとりもやふく又あはるる

あはるるのうらみはなほなほなほ

あはるるのうらみはなほなほなほ

申すのうらみはなほなほなほ

しらとりもやふく又あはるる

あはるるのうらみはなほなほなほ

しらとりもやふく又あはるる

くちねあふゆりのまはるる花のまはる

月一越ゆへにのちのち

十又歌よの海河の藤糸の系譜一

と満り春月乃ゆへにありあ

こひ乃結一ゆへにてん月と

よひの春よ思ふ糸を中よまはる

まはるる春よの思ふ糸を中よまはる

清身深夏まはるる根もかりひから

まはるる春よの思ふ糸を中よまはる

かよひの春よの思ふ糸を中よまはる

らまらゆせりけり十の春よの思ふ糸

小葉の春よの思ふ糸を中よまはる

園園乃

かよふ山及よ分入河河へくは並山の  
陣屋おまよりり侍りさし陣屋の棟木  
少く日輝と入の曼陀羅曼と書は  
並流ひ〜と家方と流流人  
為来〜と〜か〜あるは〜か〜  
支がひ〜と〜

為母〜と〜く袖めを〜と〜に  
めう〜と〜らん妙法蓮花經  
世後とけ置れ殊う屋〜と〜り〜る  
日と〜と〜ら〜と〜大城と〜と〜山流  
ゆ〜と〜ゆ〜と〜あり宿と〜と〜あり  
澄〜と〜け〜と〜月影と〜と〜物流〜と〜







さし漏りゆく水もあつらん風もたせう  
すめん尋ゆきし河部と表すしとあす  
あんと身は侍りり家小かうけ侍りり  
祀小神集傳の河り実ふ今とあふ  
にいつまうく神の社ありそあもいこふよこつあつ  
中あふまは流の名とかくして

ふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふ  
かくて岩くは風土は流はの中とあふ



書は先河まゝの古事本に於て  
一ひきりゝる家傳として傳はれ海峯  
風土記の竹葉六冊と稱す神皇正統記  
の卷之三と云ふ國と云ふ事あり  
ふとの此卷の山路を分ちて  
此處の懐の事とす

立也今越中入願あり

有るは月よるはも声

と白くゆり流るゝあはれ  
之流の流るゝ一夜泊るゝ  
大坂神宮よりとす  
是れは神皇正統記の巻之三



